

『鬼ロリババア後日談〜クリ引き回しの刑〜』

関東某所にある山間の小さな村。そこが青年の故郷であった。

日本の原風景が色濃く残る土地と言えば聞こえはいいが実際はコンビニもなく、電車も走っておらず、およそ現代人が過ごすには不便すぎる土地である。

そんな場所でも彼にとっては生まれ育った大切な場所であった。

平凡で、平穏で。ともすれば退屈な日常。このままきつと何事もなく年を取っていつかは死んでいくのだとずっと思っていた。

——しかし、そんな日常は一瞬にして崩壊した。

しかし、そんな日常は一瞬にして崩壊した。

突如現代に目覚めた自らを“鬼”と名乗る少女。見た目こそか弱い娘であったがその柔肌は刃物を弾き、銃弾さえも意味をなさない。村の駐在や力自慢の男たちでさえ歯が立たず、あつという間に村は制圧された。

鬼の支配がはじまってからはまさしく地獄である。いつ殺されるかわからない恐怖におびえながら年貢と称した搾取によって窮していく。警察に助けを呼ぼうにも「鬼が出た」など第三者が聞けば妄言にしか聞こえないだろう。当然ながら救援が来ることはなかった。

もはや絶望的な状況にあって、どこからか噂を聞き付けたのか名のある修験者や霊能力者が現れたが——ただ一人として帰っては来なかった。

最期に向かったのは陰陽師を名乗る青年だったが彼が出て行つてすでに三日が経とうとしている。生存の望みは薄いだろう。

そして今日も一日が始まる……はずであった。

「おうい、大変だ！ 大変だあ！ あの人が帰ってきたぞお！」

それはまさしく福音とも呼ぶべきモノであった。

その知らせを受けた青年は大慌てで山の麓へと向かう。するとそこには無傷での生還を果たした陰陽師と、リードで繋がれた鬼の姿があった。

鬼は腰を大きく前に突き出したようなポーズを取っており、リードの先は彼女の股間へと繋がっている。自分たちに見せていた恐ろしい表情はどこへやら。鬼の頬は赤らみ、玉のような汗が肌を伝っていた。

「……おい」

「んひいッ♡ わ、わかっておる……♡」

不意に男がグイッとリードを引くと鬼の口から甲高い悲鳴が上がる。彼女はチラリと男を上目遣いに見つめ、グツと唇を噛みしめた。

そうして前垂れを捲り上げた瞬間、村人たちからどよめきが起きる。

あどけない姫割れの上にそびえたつ異様な肉塊。それが陰核——クリトリスだと気づくには少しばかりの時間を要した。親指ほどにまで肥大化したそれは村人たちの視線に怯えるがごとくびくびくと小刻みに震えている。

「んくっ……んううッ♡」

風に撫でられただけでイってしまったのか股座から潮がピュッと吹きあがる。それが男による調教の結果だというのは誰の目にも明らかであったが同情する者はひとりもない。急かすようにリードを引かれた鬼は腰をへこへこと動かしながら、にへつとだらしのない緩み切った笑みを浮かべた。

「わ、我は……私は、この度……このお方のクリ奴隷となりました♡ に、人間様にご迷惑をおかけして、誠に申し訳ありませんでしたあ♡」

好奇と侮蔑の視線に晒されながらの謝罪。心からの屈服がそこには見えた。

ゴクリ、と。群衆の中から生唾を呑み込む音が聞こえる。

もしこの現場を他の誰かが見れば企画物A Vの撮影だと言っても信じたであろう。そう言い切れるほどにこの状況は異常であった。

「……行くぞ」

村人たちの視線を受ける男は鬱陶しそうに頭を振り、のそのそと歩き出す。鬼も続くが陰核を引かれる痛みと快楽に耐えかねガニ股気味にひよこひよここと歩く様は驚くほどに滑稽だ。

その姿に村人たちの間からクスクスと笑いが起きる。中には露骨に股間を膨らませている者すらいた。

「く、くそおおッ！ 見るな、わらうなあああッ！」

羞恥と屈辱に塗れ、首まで真っ赤にした鬼が吠えるが意味はない。完全に無力化された今、今の彼女は村人たちにとって恐怖の対象からただの笑い者へと成り下がった。

「んぎよおッ♡ 歩く♡ 歩くから引ッ張るにゃあッ♡」

リードを引かれ、口を尖らせながら歩みを再開させる。

すでに限界なのであろう。足はガクガクと震え、内腿を愛液が伝い彼女が通った後に点々とした轍が残っていた。

それでも男は彼女のことなど意に介さず歩を進めていく。今の彼女にとってそれは拷問にも等しい行為であった。

「おほッ♡ ま、まてっ♡ 今イッとするッ♡ イッとするからあッ♡」

前傾姿勢のまま内股を擦り合わせ、へっへつとだらしなく舌を垂らす。陰核はおろか乳首さえも固く尖らせる様は息を呑むほどに淫猥だ。前垂れは潮を吸って重く垂れさがり、前面に濃い染みを作っている。

が、当の男は彼女を一瞥しただけ。依然としてリードを引いたまま歩を進める。

——パシャッ。

不意に、カメラのシャッター音が聞こえた。どうやらひとりの村人がスマホのカメラを起動させたらしい。

その気持ちは青年にも痛いほどに理解できた。現に自身のズボンもはち切れんばかりに膨れ上がっている。ただでさえ若い女に飢えている田舎の男にとってこの光景は絶好のカズであろう。

陰陽師はじろりとそちらを睨めつける――が、

「……俺は撮るな」

とだけ言って、おそらく自前と思われる狐の面を着けた。

もはや止める者は誰一人いない。我先にとスマホを取り出し、彼女の痴態をカメラに収めていく。写真のみならず動画を撮る者さえ現れ、中には物陰にこそそと隠れて陰莖を扱きだす者すらいた。

「おおっ、おによれ、おによれえええ……♡」

鬼は涙を滲ませながら悔しそうに顔をしかめる。本来の彼女ならばこの場にいる全員を陰陽師も含めて皆殺しにできたであろう。

しかし力を奪われ陰陽師のクリ奴隷にされた彼女にできることなど何もない。せめてこれ以上の痴態は晒してなるものかと歯を食いしばって堪えようとするがそれも無駄であった。

「んッ、ぎいいいいッ♡」

目を剥き、身体を仰け反らせながら潮を噴く。立っていることさえもおぼつかなくなり、そのまま後ろに倒れ込んだ。潰れたカエルのように大の字に寝そべった彼女の顔は甘く蕩け、口元には喜悦の笑みが浮かんでいる。

悔しいのに、恥ずかしいのに、気持ちいい。それは彼女にとって抗いがたい快樂であった。鬼としての彼女は間違いなく強者だった。封印こそされてしまったがその時でさえ名のある陰陽師たちが束になってようやくだったのである。

しかし、今はどうだ。

卑怯な手を使われ、心身の自由を奪われたばかりか女として、鬼としての尊厳を踏みにじられている。

屈辱だ。己の無様さに怒りすら覚える。生き恥を覚えるくらいならば死んだ方が何倍もマシだ。

だというのに、男によって開発されきった身体は呆れるほどに従順だった。今や彼から与えられる如何なる責めも快樂へと直結されてしまう。仮に彼が死んで自由の身になったとしても再起は絶望的であろう。

「ほひっ♡ んびよおおおッ♡ やめりょッ♡ やめりよおおおッ♡」

苛立たしげに引っ張られるリードによって陰核がビンビンと伸び縮みを繰り返す。鬼は出来損ないのブリッジのような体勢になりながら潮を撒き散らし、白目を剥きながらぶんと首を振った。

「もっ、むりっ♡ あるくのむりっ♡ クリイキとまらぬっ♡ クリちぎれるうううううッ♡」

手足を危険なほどに痙攣させ、口の端に泡を乗せながら甘い絶叫を上げる。陰核を結ぶリードに手を添えるがおそらくそれにも術が施されているのだろう。引きちぎれないのがわかるとせめて痛みだけでも逃そうと腰を高く上げた。

陰陽師は呆れたようにため息をつき、そのまま彼女をずるずると引きずっていく。村から出ていくまですっと、彼女は絶頂を繰り返したままだった。